

「カリブの野球国を歩く」⑤

野球十包括的な人間形成に力

ドミニカ共和国編②

野球大国のドミニカ共和国には、メジャー全30球団が「アカデミー」と呼ばれる若手育成施設を構える。未来のメジャーリーガーを育成する施設では、技術や才能を伸ばすことはもちろん、野球から離れても自立できる人間づくりを目指している。

パドレス施設潜入

ドミニカ共和国の首都サンクトドミンゴから南へ車で約1時間走ると、プラーナバジョという小さなビーチに着く。そこを見下ろす高台にそびえるのが、パドレスが08年に開校したアカデミーだ。他球団の多くは首都の東、サンペドロ・デ



パドレスアカデミー施設

マコリスにアカデミーを置くが、パ軍は経済的に恵まれない南部を拠点にする。運営を担当するヘスス・ネグレッテ氏が、自慢の施設を案内してくれた。「アカデミーで働く従業員の大抵が地元出身者。食材や消耗品の調達も地元密着型にして、できるだけ経済的に還元できるシステムを作り上げました」。

眼下にカリブ海が広がる約15軒(約6万5000平方メートル)の広大な敷地には、天然芝の球場が2面半、選手の手泊施設や講義棟を含む4つの建物が並ぶ。大リーグ養成所ともいえるこの施設では、中南米から17歳以上の約70人が、夢を指して練習する。

食堂、ロッカールーム、トレーニングルームなど、マイナー球団に負けない最新設備。寝室は2人1部屋で、レクリエーション室にはテレビやパソコン、ビリヤード台などが並ぶ。同氏は「ドミニカ屈指の施設。実際、この施設や育成方針

が気に入って、他球団より低い金額でも契約したいという選手がいるほどです」と誇らしげに話した。

朝から晩まで野球漬けの生活にはしない。練習は午前中に3時間ほど行う短期集中型。午後は室内講義で、その日の練習の目的や意味を振り返った後に、英語や一般教養の授業に費やされる。夕食後に自主練習の時間もあるが強要はしない。

同氏は「まだ10代の子供たち。練習漬けにして野球の楽しさを奪ってはいけない。勉強やリラクゼーションの時間、よく食べて寝る時間も大事。オンとオフをうまく切り替えられる技術を身につけることも、メジャー



パドレスアカデミー施設のトレーニングルーム

選手になる1つの要素だと「思います」と、自主性を育てることを主眼に置く。

賭博日本(コメント)

定期的に講師を招いて基本的な教育や英語の授業を行うのは、一社会人として自立するための支援でもある。現実には、アカデミーに在籍する選手全員が渡米できるわけではない。「アメリカへの道が開ざされた時、路頭に迷わないためにも教育は必要」という、まだ経済的には貧しい同国ならではの事情もある。禁止薬物を摂取して安易な成功を求めないためにも、正しいトレーニング方法やサプリメントの取り方も教えている。

パ軍同様に他球団のアカデミーでも、野球だけではなく、より包括的な人間形成に力を入れている。そこには、賭博問題など不祥事に揺れる日本球界にとっても、見習うべきヒントがありそうだ。

(おわり)

【佐藤直子】

12日からシリーズ13「ゴードンとの再会」

「カリブの野球国を歩く」④

楽しくが基本！少年指導も褒め連発

ドミニカ共和国編①

前回の13年WBCで優勝したドミニカ共和国は、開幕時に米国に次ぐ82人がメジャー登録された。殿堂入りした元投手のペドロ・マルティネス氏(元メッツ)や今季限りでの引退を表明するオルティス(レッドソックス)らを輩出したカリブの盟主を歩き、現地の野球熱に触れた。

日本へ指導法輸入

首都サンクトドミンゴ。着陸前に飛行機の窓から地上を見下ろすと、至るところに点在する野球場の多さに驚かされる。ドミニカ共和国を歩けば、球場、公園、道ばたと場所を問わず、笑顔で野球を楽しむ子供たちに出会う。

ドミニカ野球の基本は「野球を楽しむプレーすること」だ。同国出身の選手が見せる守備の柔らかなグラブさばき、そしてパワフルな打球と打撃は、身体能力の高さだけがすべてではない。幼少期から一貫して行われる「個々の才能や長所を伸ばす指導」がベースになっている。

子供たちにとって大切なのは、試合の勝敗以上に、長所を磨いて将来的にメジャーで活躍することだ。投手フォームが個性的でも、ストライクが投げられればいい。足が遅ければ、打球を速く飛ばして走る時間を稼げばいい。監督やコーチから飛ぶ声は「いいぞ、その調子」「次はもっととすごいプレーができてうだな」という褒め言葉が並ぶ。間違っても、「あんな球も捕れないのか？」などの叱責(しっせき)は聞かれない。



全体練習前に子供たちの練習相手になるDeNA簡着

◆主なドミニカ共和国出身の現役メジャー選手◆

選手(所属)	昨季成績
投手	
ネーロ	2勝10敗4.44
ピコク	4勝13敗4.44
内野手	
オバエ	213本塁打
ルテカ	250本塁打
ホル	277本塁打
ベルトル	244本塁打
ス	287本塁打
ス	302本塁打
ス	287本塁打

理由は単純明快。試合で投手は正面からボールを投げるのだから、同じ状況でボールをバットの芯で捉える練習をしなければ意味がないと考える。

ドミニカ共和国に代表される中南米の指導方法を日本に紹介しようとするのが、NPO法人BBフューチャリーの阪長友仁氏(34)だ。新潟明訓で甲子園に出場し、東京6大学の立大で投手を務めた同氏は、一般企業を2年で退職後、アジア、アフリカ、中南米で野球普及に携わり、日本と違う野球のあり方に感銘を受けた。

「中南米の野球を知れば知るほど、身体能力やハンダ精神の違いがすべてではない、長期的な視点で能力を伸ばす育成方法は日本でも可能だと、感じました」

各地で講演活動をするか

明日はドミニカ共和国編②「虎の穴アカデミー」

長期連載「野球の国から」2016「意見」感想をお寄せ下さい。〒104-8055(住所不要)日刊スポーツ新聞社野球部「野球の国から」まで